

「アルジャーノンに花束を」における3つのキーワード

高 島 章 展

「アルジャーノンに花束を」は知恵遅れの主人公チャーリー・ゴードンが、特殊な脳外科手術を受け、知能指数が3倍になったことにより、自分が思いもしなかった世界に飛び込み、自分の人生の明るい側面、暗い側面の2つの側面を味わうという作品である。作者のダニエル・キースはこの作品の中で、ある言葉を何度も使用することによって、手術後のチャーリーの変化を巧みに表現し、そして作者なりの人間論を述べている。私はこの中で3つのキーワードに注目し、ゼミナールのテーマとした。

第1のキーワードは“fun”である。この言葉は「面白み、楽しみ」といった意味を持つが、別の意味で「笑い者」といった人を中傷した意味を持っている。手術前のチャーリーは、知恵遅れの自分が振舞う姿を見て喜んでいる職場の同僚に対して“fun”を用いて、「自分は周囲の人から愛されて、皆が構ってくれて楽しい。」と感じています。これはチャーリーが生まれつき持っている人の善さ、無邪気さが表われているように思う。それを証拠に手術後のチャーリーは次第に賢くなるにつれて、実は自分は人に愛されているのではなく、馬鹿にされているのだと気づき、「楽しい」の意味で使っていた“fun”を「からかい」の意味で使っている。ここで注目すべき点は、賢くなったチャーリーが“fun”の新たな意味を覚えた事ではなく、赤ん坊のように無邪気だったチャーリーが羞恥心という人間らしさを持ったということである。作者はこの意味をうまく使い分けることによってチャーリーの人間としての成長過程を表現したと言える。

そして、チャーリーが憧れた“smart”（賢い）という言葉はこの作品の重要なテーマでもあるが、チャーリーにとって賢くなることは決して幸せなことではなかったように思える。先に述べたように、手術後のチャーリーは賢くなるにつれて次第に人間らしくなっていく中で彼が持っていた無邪気が消え、羞恥心や人を憎む心を持つようになる。知恵遅れのチャーリーは人間の醜さ、悍しさが見えなかったのである。作者は“smart”を「賢い」の意味で用いたのではなく「人間の醜さ、悍しさ」を表現したかったのだと思う。

最後に“friend”という言葉もキーワードとしてあげられるだろう。自分を馬鹿にしていた同僚を友達と思っていたチャーリーが人間らしさを持つとハツカネズミのアルジャーノンを一番の親友と言うようになる彼の思いは「人間は他の動物に比べて知恵を持っているだけで純真な心を失った一番下等な動物ではないのか。」と訴えているのだと思う。

作者ダニエル・キースは、以上のようなキーワードを用いたこの作品で人間が生まれたままの無邪気さ純真な心を捨てずに真の人間らしさを持つべきと読者に訴えていると思う。

（指導教員 中村 敦志）